

里川思想

早稲田大学教授 鳥越 皓之

私ども「ミツカン水の文化センター 里川プロジェクトチーム」は、この数年間、里川について考えてまいりました。その成果として、『里川の可能性』が今日、発行されました。私の役割はこの本に書いてあることを魅力的に伝えることです。私は本文と結論のところ、「里川を求める思想」ということを書いておりますが、ここで本の通りのことを言っても仕方ありませんので、本日は論理的な話から少し離れた、感性的なところについてお話したいと思います。

川と人生

最近、吉本ばなの『あったかくなんかない』というタイトルの小説を読んでいましたら、次のような文章に出くわしました。

「川というのは、不思議なもので、いつでもぞっとするような怖さを秘めている。晴れた日にサラサラと流れ、陽が水辺にきらめいて、様々な植物の緑を際立たせていても、なぜか真っ黒でぞっとするようなものに繋がっているような気がする」。

凄くいい感性ですね。表面のきらめきの中に、ぞっとするようなものに繋がっている気がしている。この文章のすぐ後には、「たまに旅行などに行って、他の都市を見ると、いつでも川の無い景色は、私にはとても味気のないように思えた」とも書いてあります。そのように言われると、そんな気もします。ある都市を訪れて川が無ければ、そのような都市は味気ないようなものに思えます。この真っ黒でぞっとするものを川が持っていることが、地域空間に深い味わいを与えるという考え方です。

私はこれを飛行機の中で読んでいたのですが、読みかけの文庫本を膝の上に載せまして、このようなフレーズに惹かれる自分について思いをめぐらせてみました。「川が持っている真っ黒でぞっとするものに惹かれる」というフレーズに、私は思いもしない考え方だったので非常に惹かれました。

彼女は「真っ黒でぞっとするもの」を「時の流れ」と解釈しています。この解釈は、人によって様々なものであっていいだろうと思います。現われは多様でも、その根源において自分の心の底の気持ちと共鳴しているところは一致していると思います。心の底と言うのは、その人の人生観とか、過去の人生経験のうちの鬼が溜まったような所ではないかと、飛行機に揺られながら考えました。論理や理屈では解釈できないけれども、とても大切なものを指すのではないか。日本の伝統的な学問で、本居宣長・平田篤胤が広めた国学は、この辺りのことを非常に気にしております。国学では、人々が他人との関係をもったり、他人に自分を示す時には、いわば他人にみてもらう時に化粧をした顔を見せる、つまり“いい顔をしている”ということです。それを他人は自分だと思っている。それは綺麗な自分で、お互いにそうしていれば、それはそれで happy になります。しかし鬼を抱えている自分自身は解決しません。本当は自分は心の奥底に鬼を抱えているのです。このスッピンの顔を表出するのが、国学の解釈のひとつとしては和歌になります。もちろん和歌は社交の側面を持っているわけですが、国学からの和歌論は、非常に面白い解釈だと思います。

このような考え方を里川に適用してみますと、河川計画通りに整備された里川は、「真っ黒でぞっとするもの」が取り除かれたものだと思います。多自然型工法等によって自然を活かす工法が考案さ

れて、それはそれで大切なものだし、大きな流れだと思います。

しかし、このような例を考えて見たいと思います。私はエッセンシャルオイルを愛用しておりますが、例えばローズウッドというエッセンシャルをふりかけると、ローズウッドの香りがして凄くいい香りになるわけです。こういう樹木の香りで部屋の中を満たしますと、「いい自然だな」という香りがします。これは理想的なものなのですが、こういう香りでいいんだろうかと思うことがあります。

それぞれの川は固有の匂いや香りを持っています。それは川そのものの匂いであったり、草いきれであったり、あるいは水辺の生き物たちが発する匂いであったりします。子どもの頃に遊んだ経験がありますが、私は川の匂いを思い出します。それはエッセンシャルオイルの香りとは遥かに遠いものです。そういうものを記憶している方もいらっしゃるかと思います。それは川そのものが人間の計画を裏切って、自分から出している体臭のようなものだと思います。私は川の匂いの例で言いますと、体臭のようなもの大切さをここで言いたいと思います。つまり私たちが考える里川は、里川自身を行儀よく躡けるのではなく、先ほど川ガキという言葉が出ましたが、ややヤンチャ坊主にさせて、それぞれの川固有の匂いを発散しているような川がいいと思っています。私たちの身近な川を考える、その空間に「真っ黒でぞっとするようなもの」が底にあるような、そういうものが出来たほうが面白いのではないか。そのことを意識する必要があるのではないかと私は思います。

川に対する基本姿勢

私は今存在する川自身が持っている歴史を見るのが非常に大切だと思っています。ここでの歴史を表面的に捉えて欲しくないのですが、これは日本史で語られる歴史とは違います。日本史は高等学校で主に政治史を学びますが、そうではなく 46 歳の人ならば 46 年の、年齢に相応した歴史を持っている。一般に言われる歴史と区別するためにライフヒストリーと横文字で呼んだりしますが、そうした歴史を持っています。人間が歴史を持っているのと同じように、川も歴史を持っていると思うのです。

私が言いたいのは、「この歴史を否定しないでおこう」ということです。つまり、現在は三面コンクリートになってしまっている川でも、それを肯定することから始めようと言いたい訳です。その川は自分がそこまで歴史を持ってきたわけです。16 歳の少年に「あんたは捻くれている」と言って、頭をペチッと叩くようなものになってしまいます。16 歳の少年が、先生目から見ると心が歪んでいると思っても、とりあえずその少年のいいところを見てあげるところから話をするじゃないですか。あるいは、その子どもが語ることに耳を傾けるではないですか。否定から始めると、どうしても知識を持っていると言われる人が考える理想的なものを植えつけることになってしまう。そうするとどこにでも見られる同じようなパターンの子どものように育ててしまうのと同じように、類似のパターンの川を育ててしまう。川そのものが歴史を持っているのだから、その川を肯定する。肯定した上で私たち人間も悪いところがたくさんあるように、ダメなところを考えていく。その川が築いてきた歴史、その川も必然があって、騙されているところもあるかもしれない。私たちが川を歩きますと、年度末に土木行政の責任者が、「私を男にして欲しい」と地元の人に頭を下げて予算を執行したことも知っています。川はその土木部長を男にするために、変形の二面コンクリートにされてしまったのです。しかしその人を男にしてあげたのも、その川の歴史ではないですか。それは悲しい歴史かもしれないが、人間も同じように、自分の意に反し

てさせられてしまった歴史を持っているのではないですか。

私どもが里川を考える時に、「お前はダメだ。だから改良する」とされ続けるのではなく、「お前もよくここまで酷いところまで歩んできたな」と言ってあげるところから始める。そうしたら私どもが気づかないその川の特性的に見えてくるような気がします。論理から離れた感性の基本姿勢として、こういうところから里川を考えてみたいと思います。

里川を求める思想

この本で私は、「今の里川は、19 世紀の復権」という非常に批判されそうなことを言っています。これを短い言い方にしますと「19 世紀の復権をしろ」ということです。これが反対意見をされるのも十分に分かっていますので、そのことをこの短い時間では説明を致しません。しかし私たちの本心の中に、その種のものがあるということは考えております。

ここでは「場の創造」についてお話したいと思います。封建社会が終わった時に、世界、とりわけ先進国の中で二つの大きな思想が拮抗しました。それが自由主義と共和主義です。これはともに封建社会に対する批判思想であって、大変似ています。「板垣死すとも、自由は死せず」と言ったのは自由主義で、その人たちは死んでも自由主義を標榜する政党を作りました。やや揶揄した言い方をしますと、その成れの果てが自由民主党になるかと思えます。封建社会を否定するこの二つの思想は、いくつかの国では政党となりましたが、大変不思議なことに、この日本で共和主義の政党は成立しませんでした。その理由については省略させていただきますが、封建社会を批判する二大思想のうちのひとつしか政党を作らなかった。アメリカではリンカーンから始まった共和主義政党があって、アメリカは共和主義色が大変強い国です。日本の自由民主党が自由主義の政党とは言いがたいほどに変形したのと同じように、アメリカも自由主義から始まった政党と共和主義から始まった政党がいますけど、あれが共和主義かといわれると、共和主義ファンとしての私としては辛いところがあります。もう一度リンカーンの方に戻ってください。この違いを凄く極端に言えば、自由主義は日本の社会科学の基本的な思想になっています。経済学にしても法学にしても政治学にしても、自由主義になっていて、これは市民社会に等しいと考えています。「自分の考えに基づいて、自分自身の意見を持って、自分の考えに基づいて行動することが望ましい」という思想です。「私的生活を楽しむことはいいことだ」という考え方は、なかなかいい思想です。封建社会の批判として、個というものの大切さを肯定したことは、大変いいことだと思えます。

それに対して共和主義は、ボランテア思想に近い。ボランテアというのは、自分の自立で自分が好きでやる人もいるかもしれませんが、だいたいはプライベートで“いいこと”をしたい訳で、アメリカの西部劇で言う、町を守るために男たちが銃を取るようなものです。これは本来ならば嫌なことなのです。銃を取ることは、殺される危険もあるわけで、嫌なことなんですけど、町という場を守るために行うわけです。ですから共和主義思想は「場を守る思想」だと考えてください。難しい言い方をしますと「公共性を守る」となります。私は里川が、どちらかという共和主義に近いと思っています。川という空間、場をつくる思想であろうと思っています。場というものを、私たちがこの生きている空間で、どのようにつくっていくか。つまり20世紀までは「私的な生活」と「個の自立」が大変重要であったわけです。しかしそれが成就しました。私たちが里川とか里山などの地域空間に興味を持ち始めたのは、

場に関心を持ち始めた。つまり一定程度「個の自立」が成就された段階で、さらに私たちが happy になっていくためには、どのような仕組みを築いていったらいいのか。

そうするとそれぞれの川が持っている場というものは、文化を持っています。小野さんから紹介されました岡山の早乙女踊りは昔から有名ですが、そういうものはその場で創造されるのです。どこにでもあるわけではありません。小規模なものは各地にあるかもしれませんが、江戸時代から大規模に行われているのは、岡山にしかありません。それぞれが自分の場、自分の匂いをどんどん強調したらいいと思います。そうしたら私たちが色んな場所に行っても面白いではないですか。どこに行っても同じようだったら、全然面白くない。そういうものをつくっていくものとしての場が文化と結びついてくる。一般的な文化ではなく、それをつくっていく場として里川があるのだと思います。

里川というと水を思い出しますが、川は川(水)と川原から成り立っている。この川と川原がつくるものが、文化です。演劇が川からできたこともあります。川は文化をつくる場。川は周辺の間であることが多かったのですが、そこでつくってきた文化をもう一度考えてみてはどうでしょうか。

日本の社会は、近代化の中で資本主義制を選択したものですから、土地所有は私的所有が前提になっています。私的に所有されないと市場取引が成立しません。そして地域空間は私的空間に殆どがなりました。山もなりました。ところが川は例外的に私的所有から外されました。一部、江戸期に天領になったところがあるように、私的所有は成立していない、面白い場所なんです。とりあえず今は国が“管理”しているということになっています。しかし“管理”とは誤魔化しの言葉で、河川法の論理は治水のために管理が行われていることになっていますが、一番苦しいところです。私的所有が成立しなかった理由として利益が生まれなかったということもあります。里川に関与していくということは、この怪しげな、誰の所有でもない、この空間を、私たちが知恵を出し合って、面白くやっけていこうと考えていくことです。ただ考えてはいるのですが、迷ってばかりです。お互いにアイデアを出し合って、それでも方向性が出てくるまでには、20～30年かかると思います。